

『琉球国由来記』 収載のイベについて ―オモロとの比較を通して―

照屋 理

はじめに

『琉球国由来記』（以下『由来記』）に収載された「神名」は、これまで複数の研究者によって分析の対象となり、幾度も関心が寄せられてきた。主には、神名を分類し解釈した研究や神名という語そのものの意味について考察した論文、神名の命名方法について論じたものの、神名の記述形式について注目した論文などの先行研究がある。

筆者は拙論（照屋 二〇〇九）の中で神名を分類・分析し、神名の中には神の名と聖名があることについて具体的事例を挙げ論じた。その上で神の名に注目し『おもろさうし』内でそれらの神がどのように描かれているか論じた。本稿では神の名以外にも視野に入れながら、特にイベについて論じていく。

一、神名、イベに関する先行研究

『由来記』の神名およびイベに関する主要な先行研究について述べておきたい。

伊波普猷は嶽名および神名を、その御嶽の所在地等と関連付けて解釈するという方法で『由来記』収載の嶽名・神名研究に先鞭をつけた。また、沖縄諸島の神名の多くが「イベ」という語を含むことに注目して、イベと神名を関連付けた考察を行っている（伊波 一九七四・一三二～一三四、三八一～四〇九）。

鳥越憲三郎は『由来記』の神名を「御嶽の聖名」とであると論じ、神名を三〇パターンに分類して「御嶽の聖名分類表」として整理・提示した。また、イベについても言及し伊波の「国つ神」説に対して、「神の依料としての『座』の称」（鳥越 一九六五・四六八）とした。

仲松弥秀は、イベについての直接的な言及はないが、神名に含まれる語要素について語釈を行い、神名を機能や美称、地物名など六パターンに分類した。また神名の命名方法について、本来「神」とさえ呼べばよかったはずであるという観点から、「仕方なく神の機能・美称・御嶽内の地相」等を神名としたと論じた（仲松 一九九〇…八三）。

比嘉政夫は「沖縄」「宮古」「八重山」地域の神名について、『由来記』における記述形式にそれぞれ差異がみられるとし、三地域に分けて分析している。また神名に植物名が含まれる事例があることから、イベについて「神そのものよりも『神の座所』という意味が自然」（比嘉 一九七六…二五五）としている。

玉城伸子は、『由来記』の基となったとされる基礎資料との比較作業から、「基礎資料の文章そのままを（引用）という形で取り入れたもの」、「編集方針に合う形に〈改変〉して取り入れたもの」、「内容を〈参照〉して新たに作成したと思われるもの」（玉城 二〇〇二…五八）の「三つのレベル」がある点などを指摘、イベについての直接的な言及はないが、イベや神名の記述に関わる『由来記』の編集作業について具体的に論じた。

以上の研究の他、『由来記』の神名からマキヨ等と称されるかつての村落の位置などを考察した研究（稲村 一九六八）や、オモロ語を手掛かりにして神名およびその歴史背景を考察した研究（倉塚 一九八七）等がある。

これらの先行研究の諸成果を背景にしながら、イベとは一般的に「御嶽の内奥にある神域」（中略）今では御嶽のイビといえ、その内部のもっとも神聖な場所をさす」（沖縄大百科事典刊行事務局〔編〕 一九八三…二二二）、あるいは「御嶽の神の在所。御嶽の奥まった所にあり、もっとも聖なる所」（沖縄古語大辞典編集委員会〔編〕 一九九五…八四）などとされている。

では改めて、どのような対象がイベと称されているのか、あるいはイベとはどのような意味で用いられているのか、『由来記』に収載されたイベ関連記事を手掛かりにしながら検討してみたい。

二、『琉球国由来記』に記録されたイベ

『由来記』に於いて具体的に何がイベとされ、あるいはイベと呼ばれているか、収載された記事から主要な事例を

挙げてみよう。

「神名　ゝ御イベ」という事例は除いて、『由来記』でイベという語（威部・御イベ・御イベノ前・イベガナシ・イベガマ）が含まれる記事は二五例程見える。その事例中、イベとされる対象が明示され、かつ、「イベ」という名称を含む名称が明記された事例は、卷二二二七二のみである。以下に当該例および類例等を引いて確認していく。

（一）「事物名＋イベ」について

① 卷二二二七二

二七二 嘉手志川 神名 シラカネノ御イベ

（中略）

昔日大旱、近辺ニ水無之、諸人、渴ケル故、海辺ニ水之有所ヲ求ガ為ニ、船ヲ仕立、出船之砌、此川之近辺、山ニテアリケリ。犬一疋、山中ヨリ水ニ濡出来ヲ人見逢、不審ニ存、彼ノ犬ヲ列、右之山中へ行ケルニ、水ノ有所ヲ見セ、大則、水中ニ入、化シテ石ト成。水ノ神ト相悦（中略）犬化ケル石ヲバ、石積廻シ、于今、水中之石御イベト申伝也」（外間・波照間 一九九七：二五六。傍線筆者）

高嶺間切屋古村の井泉「嘉手志川」の記事である。旱魃時、犬の導きによつて発見されたという説話が記されている。傍線部に注目したい。村人を井泉まで導いてきた犬は水中で石と化す。人々は「水ノ神」と恭悦し、その水中の石を石垣で囲い「水中之石御イベ」と呼び伝えていると記されている。ここでイベとは、水中の石もしくは石とその周辺の石垣で囲まれた空間を差すことが想定されよう。尚、本事例の神名は「水中之石御イベ」ではなく「シラカネノ御イベ」と記されている。神名としては、石はシラカネ（銀）と荘厳化して神名とされていることが窺える。

この記事から、事物（ここでは石）あるいはその事物がある空間がイベとなることがある、神名の命名方法等として、事物もしくはその事物のある空間をイベとした時、神名を「事物名＋イベ」と命名することがある、神名の語要素としての事物名を荘厳化して表現することがある等の示唆が得られる。

以下に類例を挙げ検証してみよう。

② 卷二二―二六七、二六八

「ヤラザ森 神名 マシラゴノ御イベ 同村

ヤヘザ森 神名 イシラゴノ御イベ 同村

右両所、左ヲ、ヤラザ森、右ヲ、ヤヘザ森トテ、石ヲ崇ケルナリ。建立之儀、見碑文也」(外間・波照間 一九九七・二四三。傍線筆者)

小祿間切儀間村の記事である。神名「マシラゴノ御イベ」、「イシラゴノ御イベ」を「事物名十御イベ」と捉え、両御嶽は「マシラゴ」、「イシラゴ」、もしくは「マシラゴ」、「イシラゴ」のある空間がイベであると想定される。「マシラゴ」、「イシラゴ」とは石を意味し、引用した付記を見ると石が信仰の対象とされていることから、やはり石あるいは石のある空間がイベとされていることが窺える。

③ 卷一四―八三

「此嶽者、昔此村ニ内間ノ大比屋ト云者有シガ、此森ニ小松三本ヲ植テ、我ガ念願叶ハセ給ハバ、可崇敬トテ、田畠ヘ往キ帰ル毎ニ拝之也。遂ニ此者、子孫繁栄シケル間、夫ヨリ崇敬シタル由、申伝ナリ。」(外間・波照間 一九九七・三二八)

浦添間切安謝村の拝所「ヨリアゲ森」の記事である。松が植樹され、拝まれる内に靈験が示され、それが契機となり御嶽とされている。神名「ワカマツスデマツノ御イベ」を「事物名十御イベ」と捉え、この御嶽は「ワカマツスデマツ」もしくは「ワカマツスデマツ」のある空間をイベとしていることが想定される。「ワカマツスデマツ」とは松であり、由来譚を見ると、やはり松あるいは松のある空間がイベとされていることが窺える。

卷二二―二七二から得られた示唆について検証し、適合する事例について確認した。次節はヴァリエーション例について検証する。

(二)「神の名＋イベ」、「場所名＋イベ」について

① 卷一五一―二七

「城内上之嶽 神名 テンツギノカナヒヤブノ御イベ」

今帰仁間切今帰仁村の記事である。神名を「事物名＋御イベ」と捉えると、「テンツギノカナヒヤブ」、もしくは「テンツギノカナヒヤブ」のある空間が本御嶽のイベと想定される。この「テンツギノカナヒヤブ」とは何なのか。記事にはこれ以上手掛かりがなく不明であるが、別記事（卷一五一―六八一―）に今帰仁グスク内にカナヒヤブという黒石があり、それを北山王は代々守護神としてきたという記述がある。

〔前略〕城内ノ鎮所、カナヒヤブト云盤石アリ。夫レニ向テ申様ハ、代々守護神ト頼シニ、今我於敗亡ニハ汝ト共ニ亡ントテ、千代金丸ト云劔ヲ拔テ、彼ノ鎮所ヲ十文字ニ切刻（中略）于今、カナヒヤブト云鎮所者差渡五尺計ノ黒石ニテアリケルヲ、千代金丸ヲ以テ十文字ニ切刻タル旧跡、有之也」（外間・波照間 一九九七…三九三）三九四。傍線筆者）

本例は今帰仁間切の「旧跡」記事である。一五世紀初頭、琉球国はいわゆる三山時代で北山地域は攀安知の治世であつたが、臣下本部大原による謀叛・内通により、攀安知の居城今帰仁グスクは中山王尚巴志によって攻め入られる。その際の場面が右の記事だが、注目したいのは、城内の鎮所に岩石を守護神として祀っていたという傍線部分である。城内の鎮所とは先の「城内上之嶽」のことであろう。そしてその岩石がカナヒヤブと称されていることから、「城内上之嶽」の神名の語要素「テンツギノカナヒヤブ」とはこの岩石であることが窺え、岩石もしくは岩石のある空間がイベとされている事例と言えよう。但し「テンツギノカナヒヤブ」とは守護神の名であり、神名は「神の名＋イベ」という構造になっている。

② 卷一三一―六四

〔六四 コバダウノ嶽 神名 壺ツ瀬ノアマオレツカサノ御イベ

（中略）

天女終死シケル時、此嶽之内壺ツ瀬ト云大石之上葬也。彼天女骨、于今有之、村中ヨリ崇敬也。」（外間・波照間 一九九七・二七九）

大里間切宮城村、大見武村二村の拝所「コバダウノ嶽」の記事である。御嶽の由来譚として天女伝説が記され、引用部分では天女の死去後、壺ツ瀬という岩上に葬られ、その骨は人々の信仰の対象となっていると記されている。神名を「事物名＋イベ」と捉えると、「壺ツ瀬ノアマオレッツカサ」もしくは「壺ツ瀬ノアマオレッツカサ」のある空間がイベとされていることになる。付記された由来譚と照合すると「壺ツ瀬ノアマオレッツカサ」とは天女のことであり、この天女の骨もしくは骨のある空間がイベとして祀られていることを示しているよう。但し「壺ツ瀬ノアマオレッツカサ」とは事物としての骨の名ではなく飽く迄も天女の名であり、神名の構造も「事物名＋イベ」ではなく、「神の名＋イベ」となる。

③ 卷一三六〇

「六〇 友盛ノ嶽御イベ」

（中略）

聞得大君仰事ニ、本ノ在所ニ帰ランモイカバトテ、大里間切与那原、浜之御殿屋敷ト云所ニ御殿造リ一生御住居、逝去イタシケレバ、与那原ノミツダケト云所ニ葬タルトナリ。御骨ハ石厨子ニ安置シテ此嶽之御イベト、奉崇也。」（外間・波照間 一九九七・二七八。傍線筆者）

大里間切与那原村の拝所「友盛ノ嶽御イベ」の記事である。前略部分で久高島参詣に出船した聞得大君が日本へ漂流し、後に帰国するが大里間切内の海岸へ着船したとあり、引用部分では与那原村に居を構えて一生をそこで過ごし、村内のミツダケに葬られ骨は御嶽のイベと崇められたと明記されている。

まず冒頭の記載について分析してみたい。『由来記』中、特に沖縄諸島地域の各拝所に関しては「嶽 神名 御イベ」という記載パターンで嶽名および神名が記されることが多いが、本事例は「友盛ノ嶽御イベ」とのみ記載されている。嶽名は「嶽」や「森」というパターン、神名は「御イベ」というパターンが多く、本事例は神名の

パターンになってしまっている。恐らく「友盛ノ嶽御イベ」とは「友盛ノ嶽」、「御イベ」に分析され、引用した文言にも「此嶽」と見えていることから、嶽名としては「友盛ノ嶽」が適当であろう。

また、「友盛ノ嶽御イベ」とは、友盛ノ嶽のイベというくらの意味で捉えられるが、引用した文言からすると、ここでのイベはつまり聞得大君の骨もしくは骨のある空間である。既述した骨がイベとされる事例では「神の名＋イベ」という神名のパターンが見られたが、本例では神名の記載はなく、「友盛ノ嶽御イベ」は「場所名＋イベ」と分析されよう。ここでの場所名はイベのある場所の名である。

「事物名＋イベ」、「神の名＋イベ」、そして「場所名＋イベ」という構造を持つ神名の事例について見てきた。これらの事例から、

i 事物（岩石、植物、骨）あるいは事物のある空間がイベとなる場合がある。

ii ある事物あるいは事物のある空間がイベである時、神名を「事物名＋イベ」、あるいは「神の名＋イベ」、あるいは「イベのある場所名＋イベ」と命名する場合がある。

iii 神名の語要素である事物名を莊嚴化して神名とする場合がある。

といった神名命名に関する示唆が得られよう。

(三) イベ＝事物の可能性

ここ迄挙げてきた事例では事物あるいは事物のある空間がイベとなる場合があることは示されたが、そのいずれであるかは不明であった。しかし、他の事例群を見渡してみると、『由来記』に於いてはイベ＝事物という概念が垣間見える事例が散見されるが、空間としてのイベの概念が記された事例は見当たらない。

① 卷一四一二〇

二二〇 神社

(中略)

ホリイダシ見レバ、有靈石三、一ハ笑キヨ、一ハ押明ガナシ、一ハイベヅカサト、奉祝也。」（外間・波照間 一九九七・三三九。傍線筆者）

中城間切安里村の神社の記事である。付記された由来譚によれば、同間切屋宜村の百姓が夢に出てきた権現のお告げ通り、地中から掘り出した靈石と海岸へ漂着した靈石を祀ったのがこの神社の由来となっている。引用部分は靈石を地中から掘り出す場面で、百姓が掘り出した靈石には名が付されているが、特にイベガナシという名称には注目される。ここではイベという語は石そのものの呼称とされている。尚、同巻の二二二項は類例として挙げられよう。

② 卷二一―三三三

「三三二 宮里嶽

（中略）

竊ニ髑髏ヲ盜取、宮里嶽ノ内、巖ノ中ニ奉安置、崇敬仕タルト也。」（外間・波照間 一九九七・二六二）

真壁間切真栄平村の事例である。尚徳王の世子の亡骸のある腓城の靈験に肖った男が、腓城から髑髏を盗み出し、真栄平村の宮里嶽の巖の中へ隠し崇めたとある。内容から分かるように本事例は御嶽由来譚ではない。宮里嶽は髑髏が置かれる以前から存在しており、髑髏をイベとして御嶽が成立した訳ではない。また宮里嶽の「巖ノ中」とは、「御嶽の奥まった所」にあり、もともと聖なる所（沖縄古語大辞典編集委員会「編」一九九五・八四）というイベの定義に当てはまるものであり、イベは存在すると考えられよう。にも拘らず神名の記載がなく、拝所名は「御イベ」という形式を採っておらず、記事中にイベという語が見当たらない。これは本御嶽にはイベが無いと編集の主体であった王府（旧規由来寄奉行）によって判断されたことが類推される。巻五―三三三も類例として挙げられよう。

ここで、現在一般的な定義であるイベ＝神聖な場所・空間という概念は『由来記』編纂時には採用されておらず、イベ＝事物という概念基準で『由来記』編纂が進められた可能性を指摘しておきたい。

(四) 『琉球国由来記』のイベの種類について

① 事物 a || イベ ↓ A + イベ

本章第二節で神名命名に関する示唆 i、ii、iii が得られることを論じた。ここで、イベ || 事物 という概念基準で『由来記』編纂が進められた可能性が認められるならば、神名命名に関して

i 事物 (岩石、植物、骨) がイベとなる場合がある。

ii ある事物がイベである時、神名を「事物名 + イベ」、あるいは「神の名 + イベ」、あるいは「イベのある場所名 + イベ」と命名する場合がある。

iii 神名の語要素である事物名を荘厳化して神名とする場合がある。
と改められよう。

ここでイベとされる事物を「a」とすると、a が荘厳化された表現や a が存する場所、あるいは a が神として認識された表現など、神名の語要素としての a に関する表現を全て「A」で表すと、事物 a がイベならば神名は「A + イベ」であるパターンが抽出される。つまり 事物 a || イベ ↓ A + イベ と図式化されよう。

『由来記』の神名群 (九三九例) をこの図式で以て見渡し、語義未詳の事例等を除きながら各神名の語要素 A から事物 a を類推していくと、「イシ」(三八例)、「イシラゴ」(二四例)、「マシラゴ」(二二例)、「イシラゴマシラゴ」(四例)、「イシナカゴマシラゴ」(一例)、「イシラゴマシラゴイシ」(二例)、「瀬」(一例) や、また「コバ」(蒲葵。五六例)、「マネ」(クログ。方音マーニ。三二例)、「マツ」(松。一四例)、「アカウ」(アカフ) (アコウ。八例)、「オソク」(ウスク。五例)、「木」(三例)、「ガジマル」(一例) といった神名の語要素から、『由来記』に於いては主に岩石類や植物類がイベとして記録されていることが見てくる。

ここまで『由来記』収載記事を基にイベと称される対象およびその意味について検討した。『おもろさうし』にも「いべ」が登場する。次章では、祭祀歌謡オモロに於いてイベがどの様に描かれているか確認していく。

三、『おもろさうし』に歌い込まれたイベ

本章では『おもろさうし』に登場する「いべ」について、どのように描かれているのか、確認していく。また『由来記』に於いてイベとして想定された岩石（イシ、イシラゴ、マシラゴ、瀬等）、植物（蒲葵、クロツグ、松、アコウ、ウスク、木、ガジマル）についてもオモロでどの様に描かれているか確認する。

尚、引用するオモロは通し番号で示し、本文表記は『定本 おもろさうし』を参考にし節名、詞書は省略した。反復句は訳文部分を で示すなどした。訳は筆者による。

（一）オモロにおけるイベ

『おもろさうし』にイベは五例（重複含まず）のみ見え、いずれも「いべのいのり」と歌い込まれている。例えば三六七番オモロでは「一 きこゑ大ぎみぎや いべのいのり しよわちへ／又 とよむせだかこが つかさいのり しよわちへ」（聞得大君がイベの祈りをし給いて／鳴響む精高子がツカサ祈りをし給いて）とある。

『おもろさうし』に於いて「いのる」（祈る）は複数の用法があり、例えば祈る対象が神であるか否かは明示される。祈る対象が神である場合、九六番オモロ「又 かねのしま のろ／／ ぜるまゝは いのて」（久米島のノロ達が火の神を祈つて）のように助詞「は」（傍線筆者）を伴って用いられる。対象が神ではない場合、四番オモロ「一 きこゑ大ぎみぎや てにのいのり しよわれば」（聞得大君が天の祈りをし給えば）のように「は」以外の助詞（傍線筆者）を伴って用いられる。

この「いのる」の用法に従うと「いべのいのり」と歌い込まれたイベは神ではない。四番オモロ「てにのいのり」と考え合わせると、神の在所と捉えられよう。尚、『おもろさうし』では神の憑依・憑霊現象を動詞「おれる」で表現するが、少なくとも「いべ」が憑依するといった表現や場面は『おもろさうし』には出てこない点をここでは確認しておきたい。

(二) オモロにおけるイシ、イシラゴ等

① イシラゴ・マシラゴ

『おもろさうし』には「いしらご」五例、「ましらご」四例が見える。一例を除いて全て動詞「おりあげる」（織り上げる）、「つみあげる」（積み上げる）を伴った表現で歌い込まれている。

・五二七番オモロ

—— (略) ——

又 いしべつは こので

—— (略) ——
石槌を準備して

又 かなべつは こので

金槌を準備して

又 いしらごは おりあげて

イシラゴを織り上げて

又 ましらごは つみあげて

マシラゴを積み上げて

又 なみのうへは げらへて

波の上宮を造営して

又 はなぐすく げらへて

端グスクを造営して

—— (略) ——

—— (略) ——

右のオモロに於けるイシラゴ・マシラゴは、織り上げられた布のように美しい石垣を造る為に槌によって整形され積み重ね並べられていく建材として歌い込まれている。

この他、一三四八番オモロ反復部に「いしらご」けずたる きよらや（イシラゴを削った美しさよ）という表現が見えるが、右例同様、整形の為に削られる対象として歌い込まれている。

② イシ

『おもろさうし』には「いし」（石）の他、「いしがいのち」（石の命）、「くもこいし」（立派な石）、「つしやこのいし」（粒子の石）、「ねいし／まいし」（根石・真石）等の事例が見える。多いのは長い年月変質しない性質を持つものとして永遠や永久等の比喩的表現として歌い込まれる事例である。

・六三五番オモロ

—— (略) ——

又 いしがいのち

かねがいのち

又 かはらいのち

てもちいのち みおやせ

—— (略) ——

石の命

金属の命

勾玉の命

手持ち玉の命を奉れ

—— (略) ——

右のオモロは石や金属、勾玉の生命力を王へ捧げよとの内容だが、単に身近な事物の生命力を掻き集めて長命を上しようとしているのでは勿論なく、長期間変質しない石や金属、神役がある限り代々継承される勾玉に付随する永遠に比される性質が永の生命力として選り抜かれ列挙されている。四五六番オモロの反復句「いし かねのやにをのち つぎよわれ」(石、金属のように命を継ぎ給え)も類例として挙げられる。また、四五〇番オモロ「いしかねこ」、二五二番オモロ「まいしがね」といった人名も石、金属の生命力にあやかろうとした表現と考えられよう。

この他「ねいし／まいし」について七一三番オモロに「又 あがなさいきよ あぢおそい ねいしの 天に おゑつくぎやめ／又 てだなさいきよ あぢおそい まいしの あめに もいつくぎやめ」(我が父なる王よ、根石、真石が天に生え着くまで)といった王の長命を寿ぐ表現が見え、類似の表現を含むオモロが複数ある。これは伊波普猷が「生長する石」(伊波 一九七四⑤)で論じたように石が植物のように根を張り生長するという觀念に基づいており、オモロ独特の表現である。

長期間変質しない性質から長命の比喻として歌い込まれる一方、その他の性質についての表現も見える。

・四六六番オモロ

—— (略) ——

又 あしかわの あらぎやめ

アシ井のある限り

—— (略) ——

くもさうず あらぎやめ

又 いしぎやのちてば

素晴らしい井泉のある限り
石の命といえは

いしは われる物

石は割れるので

又 かねがのちてば

金属の命といえは

かねは ひぢやむ物

金属は曲がるので

——(略)——

——(略)——

本オモロでは、石は割れ、金属は曲がるなどする性質を持つことから、それよりも枯れることなく滾々と湧き出る「あしかわ」という井泉の生命力に肖ろうとする内容である。また、一〇五七番オモロでは「つしやこのいしとかねとやに てだしひ つかば とのす 世は ちよわれ」(砂鉄の磁石と金属のように太陽の霊力が付けば殿こそ世を支配してましませ)といったように、磁力を帯びた石の磁性に着目した表現もある。

右に挙げてきたように、岩石の持つ一般的な性質について歌い込まれたオモロの他、三四六番オモロに「かぐらあつる くもこいし てづて」(天上のカグラにある立派な石に祈つて)とあり、祈願の対象として歌い込まれた表現も見える。「かぐら」は天上にある想念世界であり、ここでの「くもこいし」はそのカグラにあるとする想念上の石である。祈願対象となっていることから『由来記』に記録された石のイベを想起させる。『由来記』のイベ石は、神もしくは神座であった。オモロには「いし」が神として表現された事例はなく、前項で扱った三六七番オモロ「いべのいのり」(イベの祈り)等と考え合わせると、この「くもこいし」も神座と捉えられよう。

オモロに於いて岩石は、「生長する石」で伊波が論じたように、長い年月変質しない性質を持つものとして永遠や永久等の比喩的表現で用いられる。その一方で、石は割れる性質を持つものとして、加工される場面が多数描かれている。例えば『由来記』でイベの表現として出てくる「いしらご」「ましらご」は、オモロでは加工される対象として描かれる。また祈願の対象としての岩石の事例も見られ、想念世界における情景が歌い込まれている点や神の在所として描かれている点等が確認された。

(三) オモロにおける蒲葵、クロツグ等

① コバ(蒲葵)

『おもろさうし』には「こばしま」(蒲葵島)、「こばなみ」(蒲葵並木)、「こばもり」(蒲葵杜)、「こばのはな」(蒲葵の花)等が見え、「こば」そのものが単独で描かれた事例は無い。

八四五番オモロには「あがるいの こばもり こばのはなの さきよれば」(東方の蒲葵杜、蒲葵の花が咲くと)と、蒲葵の茂る御嶽「こばもり」や、蒲葵が花咲く季節を示した「こばのはな」といった表現が見える。

・三八四番オモロ

一 あぢおそいぎや

国王が

うへさちやる まつなみ

植え差した松並木

ともゝとす

千年も

とひやくさす いのらめ

千歳もこそ祈ろう

又 あんじおそいぎや

国王が

たてさちやる こばなみ

立て差した蒲葵並木

又 あんじおそいぎや

国王が

たてさちやる てしなみ

立て差したデイゴ並木

本オモロでは国王の意向により並木として植樹された蒲葵が、松やデイゴと共に挙がっている。このようにオモロに登場する蒲葵は基本的に植物として歌い込まれており、神や御神体として歌い込まれた事例は見えない。

② マネ(クロツグ)

オモロには見えない。他ジャンルの神歌クエーナ(「アガリユウ」)に登場する。以下引用する(外間・玉城一九八〇…二〇〇〇二〇一。尚、訳文は筆者による。節番号は丸数字記号に表記し直した)。

—— (略) ——

⑤さいは森　さいは御嶽

⑥松の並　ゆうなの並

⑦くばの並　まあにの並

⑧九年母の並　でいちなみ

—— (略) ——

—— (略) ——

齊場杜、齊場御嶽

松の並木、ユウナの並木

蒲葵の並木、クロツグの並木

九年母の並木、デイゴ並木

—— (略) ——

本クエーナでは、情況の詳細は不明であるが齊場御嶽に通ずると思われる並木として、松やユウナ、蒲葵と共に「まあに」(クロツグ)が挙がっている。先に見たオモロと同様の内容であり、クロツグも基本的に植物として歌い込まれている。

③ 松

オモロでは、蒲葵の項で既述したように並木として「まつなみ」、「なみまつ」が見える他、「なでまつ」、「こまつ」、「わかまつ」等と歌い込まれている。

・九〇一番オモロ

一　きみはいは　たかべて

たすこやま　のぼて

なでまつは　げらへて

はねうちがま　すだちへ

とぶとりと

いそいして　はりやせ

—— (略) ——

君南風神を祈って

タスコ山(拝所)に登って

撫で松を切り揃えて

羽打ち小舟を造って

飛ぶ鳥と

競って走らせよ

—— (略) ——

本オモロに見える松(「なでまつ」)は、造船用の材として歌い込まれている。また八七八番オモロに「一　山のく

にかねが なでゝおちやる こまつ」(山のクニカネ神が撫でるように育てた小松)という表現に照らすと、「なでまつ」(撫で松)という語形は、君南風が神として見守り育てた松の意であろうことが窺える。

・六五番オモロ

一 あだにやの わかまつ

あはれ わかまつ

よださちへ

うらおそう わかまつ

又 きもあぐみの わかまつ

敬愛される若松

浦を覆う若松

歌い込まれた「わかまつ」は樹木という解釈の他、人名説もある。本稿では樹木として捉えておく。本オモロは「あはれ わかまつ」に見られるように松を賛美した表現が見える。そして反復句「よださちへ うらおそう わかまつ」から、枝振りの良さがその審美基準となつていることが窺えよう。

一一二番オモロに「又 やらざだけの ひがさまつよ」(屋良座嶽の日傘松よ)という表現が見えるが、これも同様に枝振りの良い松のある御嶽の情景を歌つたものであろう。蒲葵の事例と同じく、他の植物同様、松も御嶽や各土地にある植物として歌い込まれている。

④ 木

オモロでは「き」及び「け」の語形で表記され、「くわげ」(桑木)、「くねぶげ」(九年母木)といった樹種が示された語例や「あやき」(立派な木)、「きやきやるけ」(輝く木)、「きよらけ」(美しい木)等修飾語を伴う例がある。

・八三七番オモロ

——(略)——

又 あかぎとて

ゆすぎとて とくか

——(略)——

赤木を取って

イスの木を取って疾くか

又 あやぎとて

くせぎとて ほうはしりや

立派な木を取って

美しい木を取って帆柱

——(略)——

——(略)——

本オモロでは「あかぎ」、「ゆすぎ」、「あやぎ」、「くせぎ」といった樹木が船材として登場する。同様に七八九番オモロ「しちようぎ」、七九二番オモロ「よかるけ／きやきやるけ」も船材として歌い込まれている。

この他、八九五番オモロに「あやきくら／くせきくら」(立派な木鞍)、「あやきぶち／くせきぶち」(美しい木の鞭)、一二〇二番オモロには「又 くわげ うゑて なです うゑて／又 つゞみ つくて なりよぶ つくて」(桑木を植えて、鼓を作って)と、馬具の材や鼓の材として用いられる樹木の事例が見える。

右のような加工の対象としての事例の他、既述した蒲葵や松のように植樹される事例がある。

・七五番オモロ

一 ごゑくあやみやに

こがねげは うへて

越来の立派な庭に

黄金木を植えて

こがねげが下

黄金木の下で

きみのあちの

上位の神が

しのぐりよわる きよらや

踊り給う美しさよ

又 ごゑくくせみやに

越来の美しい庭に

植樹の情景が描かれたオモロとしては七五番オモロや六三五番、九八一番オモロがあるが、既述した蒲葵や松の事例と異なり並木として植えられる事例は見えない。特に本オモロの「こがねげ」は神の出現する空間に植えられるおり、御嶽と想定される場所での植樹の情景が歌い込まれている。『由来記』の御嶽での植樹の記録が想起されるが、「こがねげ」が神あるいは御神体であるかどうかは七五番オモロでは明示されていない。

⑤ その他（アコウ・ウスク・木・ガジマル）

『由来記』にはこの他、アコウ・ウスク、木、ガジマルがイベと考えられる対象として出てくるが、オモロに語彙として見当たらず古謡にも用例がない。

蒲葵、クロツグ、松はいずれも植物として歌い込まれている。またウスク・アコウ、ガジマルは『おもしろさうし』や神歌に歌い込まれていない。まとめると樹木・植物が神や御神体として歌い込まれた事例は『おもしろさうし』やその他の神歌には見えないことが確認された。

（四）憑依現象とイベ

『おもしろさうし』に於いて岩石は長命に比される存在や加工される対象として描かれる一方、神の在所として祈願される情景等がオモロで確認された。植物に関しても基本的には船材等加工される対象として歌い込まれるのが多く、拝所に植樹する情景がオモロに登場するが、植物が神や御神体として明示された事例はないことが確認された。

ここでは改めて神へ視点を移したい。波照間一九九九は宮古に於ける民俗的事象やオモロの具体例を挙げながら神は生身の神女へ憑依・憑霊するとしている。

・七三三番オモロ

一 きこゑきみがなし

さしぶ おれかわて

しよりもり おれわちへ

なさいきよもしよ

きみふさて ちよわれ

又 とよむきみがなし

むづき おれなおちへ

名高いキミガナシ神が

サシブに降り変わって

首里杜に降り給いて

国王様こそ

キミ神と相応しくましませ

鳴響むキミ神様が

ムヅキに降り直して

まだまもり おれわちへ

真玉柱に降り給いて

——(略)——

——(略)——

このオモロについて波照間は『さしふ』『もつき・むつき』は『神の依憑する神女』のことである(中略)『君加那志がサシブ・ムツキに降り変わり・降り直した』というのは、君加那志神がサシブである神女に憑依して、と解されねばならない」(波照間 一九九九・九二三)としている。

このように神が神女へ憑依する情景は複数のオモロに見える他、南島地域の他ジャンルの神歌にも広く確認され、波照間一九九九でもミセセル、ウムイ、ティルルといった神歌が挙げられている(波照間 一九九九・九一九・九三八)。

しかし、神が神女ではなく、岩石や植物へ憑依する情景は『おもしろさうし』および他ジャンルの神歌を見渡してみても出てこない。神の在所として祈願対象ともなる岩石は、神とどのような関係の下で結びついているのであろうか。手掛かりになるのは『久米仲里旧記』(二七〇三年頃成立。以下『旧記』)に記録された世野久瀬御嶽(久米島仲里間切宇根村)に関する「神御名」と神歌ウムイの記録である。

世野久瀬御嶽に関して、「宇根村世野久瀬お嶽神御名記」との記録が『旧記』内に残されている。題目から世野久瀬御嶽の神の名を記したものと解される。内容は「世野久瀬、けをの森、いさいらくに、ましらくに、おれなふし、若つかさ、めまよきよら、わかつかさ、すでつかさかなし」(世野久瀬御嶽、靈力の杜、イシラゴに、マシラゴに、降り直す、若ツカサ、目眉清ら、若ツカサ、解でツカサ様)というもので(仲原 一九七八・一六八)、注目したいのはイシラゴ・マシラゴに降りるといふ表現である。

世野久瀬御嶽に関するウムイは、「右同時「大雨乞之時」せ野久瀬に而おもる」という題目から、雨乞儀礼の際に世野久瀬御嶽(久米島仲里間切宇根村)にて唱えられた神歌であることが分かる(外間・玉城 一九八〇・三三八 尚、訳文は筆者による。節番号は丸数字記号に表記し直した)。

- ① むかしはじまり 昔始まり
- ② けさしはじまり けさし（昔）始まり
- ③ あまみやはじまり あまみや（太古）始まり
- ④ しねりやはじまり しねりや（太古）始まり
- ⑤ せのくぜにおれて 世野久瀬に降りて
- ⑥ げをのもりおれて ゲヲ（霊力）の杜に降りて
- ⑦ おれておれなふちへ 降りて降り直して
- ⑧ いみやちへいみやなふちへ 参って参り直して
- ⑨ あがさしふおろちへ 我がサシブに降ろして
- ⑩ あがもじはお〔ろちへ〕 我がムヅキに降ろして
- ⑪ 神のまねとよる 神の真似を取る
- ⑫ ぬしのまねとよる 主の真似を取る

ウムイの詞章内容から世野久瀬御嶽において神が御嶽に降り、サシブ・ムヅキに降りるといふ憑依の情景を読み取ることが出来る。

つまり「神御名」の表現に依れば、世野久瀬御嶽において神はイシラゴ・マシラゴ（岩石）に降り、ウムイの表現に依れば、神はサシブ・ムヅキ（神の憑依する神女）に降りることになる。いずれの表現も誤っていないとすれば、ここで考え得るのは岩石、神女双方に神が憑依するパターンと、段階的に神が降りてゆき、最終的にいずれかに憑依するパターンである。

前者の場合更に、一柱の神がある時は岩石に、ある時は神女に憑依するというパターンと、同一御嶽内で二柱の神が岩石と神女にそれぞれ憑依するパターンとが想定される。しかしいずれもオモロや他の神歌そして民俗事象としても見えないことから考え難い。ここでは後者の、段階的に神が移動し、最終的にいずれかに憑依すると考えるのが妥

当であらう。

そして複数の事物を段階的に移動しながら神が降りるという「段階的憑依」を想定した場合、岩石か神女のいずれかへ先に移り、最終的に憑依するかを考えなくてはならないが、一旦神役へ移動した神が岩石へ憑依するという事象はオモロや他の神歌そして民俗事象としても見えない。やはり神は一旦岩石へ、そして最終的に神女へ憑依すると想定するのが順道と言える。

「段階的憑依」という想定に関連して、同じく『旧記』収載の「右同時〔大雨乞之時〕ひらまつ二而御たかへ言」を以下に一部引く（外間・玉城一九八〇…六〇 尚、訳文は筆者による。節番号は丸数字記号に表記し直した）。

——（略）——

⑮ めまよきよら

⑯ あすかきよら

⑰ すて司

⑱ わか司

⑲ みなとかしら

⑳ とまりかしら

㉑ きくがはな

㉒ きくがゑだ

㉓ うつりあすひ

㉔ わたりあすひ めしよわろ

㉕ いへのまぬし

㉖ いへの司かなし

——（略）——

——（略）——

目眉清ら

アスガ清ら

解で司

若司

港頭

泊頭

キク（聖域）の花

キク（聖域）の枝

移り遊び

渡り遊びなさいます

イベの真主

イベの司様

——（略）——

本オタカベは標題に依れば雨乞儀礼の際に平松御嶽（仲里間切儀間村）にて唱えられたものである。平松御嶽の神御名が「いたきよら、たなきよら、あしかきよら、すでつかさ（かなし）、わかつかさがなし。みなとかしら、とまりかしら、いへとのかなし、ちやしよとのかなし。」（仲原 一九七八・一八九）であることからすると、右に引いた部分は平松御嶽に於ける神についての表現であることが窺える。

注目したいのは二一節目から二四節目の「きくがはな／きくがはなだ／うつりあすひ／わたりあすひ めしよわろ」という詞章である。この部分は「いへのまぬし／いへの司かなし」の行為として描かれており、神が御嶽の聖域に咲く花や枝へ渡り移っていく様子が示されている。³これも世野久瀬御嶽と同じく「段階的憑依」を示すものであろう。世野久瀬御嶽に於ける神は岩石から神女へ段階的な憑依をしていたが、平松御嶽では御嶽内の植物へ神が移り遊び渡り遊びした後、最終的に神女へ憑依したであろうことが考えられる。

この他『旧記』収載の「仲里城御嶽御いべ之事」に「いべ名」として記された「いしらぐ、ましらぐに ぢやよくめしやる、がけちめしやる、大なぎ、さたとのがなし」⁴（イシラゴ・マシラゴにまします、いらつしやる、大ナザ、サダトノ神様）という表現から、仲里城御嶽についても世野久瀬御嶽と同様に、まず神座としての岩石へ移り、最終的には神女へ憑依する「段階的憑依」が想定される。

同じく『旧記』に記録された「けつま森、見あけ森、きくがえだ、きくがはなに、ちやよくめしやる、あもとめしやる、あふらい、さすかさかなし」⁵（ケツマ杜、立派な杜、聖域の枝、聖域の花に、まします、いらつしやいます、アオリヤへ、サスカサ神様）との神御名から、ケツマ御嶽（仲里間切比屋定村）に於ける神についても、平松御嶽と同様の「段階的憑依」が想定される。

『おもろさうし』および周辺の神歌に於いて岩石や植物は長命に比される存在や加工される対象として描かれる一方、祈願の対象とされる事例が確認された。『おもろさうし』に於いて岩石が祈願の対象とされる情景は『由来記』収載の石のイベを想起させるが、『旧記』収載の神歌を手掛かりにした場合、オモロに於ける岩石や植物は神が段階的に移動していく途中の橋渡しの役目を果たす事物、つまり神ではなく一時的な神座として祈願されていることが想

定された。

おわりに

ここまで確認されたことを『おもろさうし』から『由来記』へと経過してゆく大きな時間の流れに留意しながら、改めて粗描してみた。

オモロや他の神歌で描かれているのは、神が生身の神女へ憑依するシャーマニズムの情景である。岩石や植物、骨といった事物へ神が憑依する事例はオモロ等の神歌には確認されなかった。また、オモロ・神歌に歌い込まれた「いべ」は神の一次的な在所であった。

『由来記』において記された神名群を見渡すと、いべとして岩石、植物、骨等があった。『由来記』のいべについて鳥越憲三郎は「神の依料としての『座』の称」（鳥越 一〇六五・四六八）であるとし、比嘉政夫は、例えば「植物＋ツカサノ御いべ」について、「ツカサは神女をさすことばであるが、ここでは、文字どおりの意味ではなく、神に結びつく植物を神女になぞらえて人格化し尊称する機能を果たしている（中略）この解釈が妥当であるならば、『いべ』は神そのものよりも『神の座所』という意味が自然である」（比嘉政夫 一九七六・二五五）とした。

しかし、より古いと考えられる『おもろさうし』や神歌に描き込まれた「段階的憑依」を想定すると、事物としてのいべを「依料」としてよいか、あるいは「神格」と考えてよいか疑問である。オモロや神歌では最終的な憑依を動詞「おれる」（降りる）で表現しており、一次的な在所への移動を「移り」という動詞で表現し「おれる」は用いておらず、明らかな使い分けがある。『由来記』に於ける事物のいべも本来的には一次的な座所であったと考えられ、依代とするのではなく一次的神座と想定するのが適当であろう。

ところで、「嘉手志川」の「水中之石御いべ」の石は神の化した石であり、換言すると石の姿をした神である点にも注意しておきたい。比較の為、巻二〇―二八の記事を挙げる。

「由来。昔物語ニ、多良間島カミナマト云フ所ニ、ガワラ瀬トテ大石ニツ有之タルトナリ。二ナガラ、チャラテト

云所へ飛越ケルヲ、ハリマタマサラト云フ者見付ケ、是靈石ナリト心得テ、四方ニ木植廻シ、ガワラ瀬ト崇メケル。
其後、右ノ御神、ガワラ瀬ニアラハレ（後略）」（外間・波照間 一九九七・四八二。傍線筆者）

多良間島の拝所「ガワラ瀬御嶽」の記事である。記事によれば、ガワラ瀬と呼ばれる二つの岩が靈験を示し、二岩の周囲に植樹し祀られている。その後神が顕現したと記されている。

本事例は、岩石が祀られている点で先の「嘉手志川」の事例と共通している。異なるのはその祀られた岩石と神が一体ではない点である。「嘉手志川」の神は、時に犬の姿をして現れ、時に石化する。「ガワラ瀬御嶽」では神は通常顕現せずガワラ瀬岩のみがある。そして「右ノ御神、ガワラ瀬ニアラハレ」とあるように、時にガワラ瀬岩に神が現れるのであり、神が岩になり、また神として現れるのではない。「嘉手志川」は神と石は一体であり、「ガワラ瀬御嶽」では岩石と神とは別個の存在である。ガワラ瀬岩はいわゆる神の宿る神座であるとすれば、「嘉手志川」の水中の石が神であると言える。

先に挙げた卷一五―一二七（城内上之嶽 神名 テンツギノカナヒヤブノ御イベ）の事例を同じ視点で見直してみると、岩石カナヒヤブが神そのものとして記録されており「嘉手志川」と同様、石＝神の事例と言える。

以上の事例等から御嶽信仰にアニミズムの概念が影響していることが窺えよう。神道や仏教からの影響であろうか。他にアニミズムの影響が窺える事例として例えば『由来記』卷一三―一二七七が挙げられる。

「此殿ノ庭ニ月白ト云イベアリ。祭之時ニ尊敬之也。」（外間・波照間 一九九七・二九五）

佐敷間切佐敷村の「苗代之殿」の記事である。本記事における「月白」とは、オモロ一二九二番に「つきしろは てづて」（ツキシロ神を祈つて）と見えるように神の名である。「月白ト云イベ」とは、例えば神座としての石を、そこに座する神「月白」の名で呼んでいることが考えられる。類例として卷一三―三二三、卷一六―三〇がある。これらはオモロ時代には神の座所を意味するイベが、『由来記』編纂時にはイベに座す神の名で称された事例と考えられる。『由来記』における八重山地域の「御イベ名」もこれに通ずるものであろうか。稿を改めて考えたい。更にいえば、オモロの時代には、いわゆるアニミズムはなかったのであろうか。あるいは既に衰えていたのであろうか。今後追究してゆきたい。

* * * * *

本稿を執筆するにあたり西岡敏氏（沖縄国際大学教授）よりご示教いただいた。記して感謝申し上げる。

* * * * *

最後に、波照間永吉先生には修士論文・博士論文をはじめ、研究者としての在り方やフルマラソン時の靴紐の結び方まで、公私にわたる様々にご指導いただいた。ここに退官をお祝いし、改めて深く感謝申し上げます。

【注】

1. 『由来記』編纂に際しては『旧規由来寄奉行』が設けられ、一人の奉行の指揮の下、三人の中取を中心としてこの書物は編集された」（外間・波照間 一九九七・五六一）とされる。
2. 類似の事例に三三六番オモロ「かなひやぶ てづて」が見えるが、オモロに於ける「かなひやぶ」は石か否か不詳であり、ここでは扱わない。
3. 仲原善忠は「うつりあそぶ蝶々に霊の姿を象徴した」としている（仲原 一九七八・一九二）。
4. 仲原 一九七八・一六〇
5. 仲原 一九七八・一九九

【引用・参考文献】（五十音順）

- 石垣市史編集委員会「編」二〇〇七『石垣市史 各論編 民俗下』
- 伊波普猷 一九七四④『伊波普猷全集』第四卷 平凡社
- 伊波普猷 一九七四⑤『生長する石』『伊波普猷全集』第五卷 平凡社
- 稲村賢敷 一九六八『沖縄の古代村落マキョの研究』琉球文教図書
- 沖縄古語大辞典編集委員会「編」一九九五『沖縄古語大辞典』角川書店
- 沖縄大百科事典刊行事務局「編」一九八三『沖縄大百科事典』上 沖縄タイムス社
- 鳥越憲三郎 一九六五『琉球宗教史の研究』角川書店
- 倉塚暉子 一九八七『巫女の文化』平凡社
- 玉城伸子 二〇〇二『琉球国由来記』と基礎資料 ―編集作業のあり方について―『沖縄文化』九三号 沖縄文化協会
- 玉城伸子 二〇〇三『琉球国由来記』巻十九と『久米仲里旧記』の神名について『浦添市立図書館紀要』No.十四 浦添市立図書館

- 照屋 理二〇〇九「南島神名からみたオモロ研究の一側面」『沖縄文化』一〇四号 沖縄文化協会
- 豊見城市史編集委員会 民俗編専門部会「編」二〇〇八『豊見城市史』（第二巻 民俗編） 豊見城市役所
- 仲宗根政善 一九八三『今帰仁方言辞典』 角川書店
- 仲原善忠 一九七八『仲原善忠全集』第三巻 沖縄タイムス社
- 仲松弥秀 一九七七『古層の村・沖縄民俗文化論』 沖縄タイムス社
- 仲松弥秀 一九九〇『神と村』 梶社
- 波照間永吉 一九九九『「おもろさうし」の憑霊表現』『南島祭祀歌謡の研究』 砂子屋書房
- 外間守善・玉城政美 一九八〇『南島歌謡大成 I 沖縄篇上』 角川書店
- 外間守善・波照間永吉 一九九七『定本 琉球国由来記』 角川書店
- 比嘉政夫 一九七六『琉球国由来記』にみる地域差——御嶽の神名などをめぐって——『南島——その歴史と文化——』 国書刊行会
- 横山重「編」一九七二『琉球史料叢書』第五巻 東京美術